瑛斗という実像、トオルという虚像

津 雅樹

written by Masaki TSU

inspired from
DEUX OU TROIS CHOSES QUE JE SAIS DE LUI: EIGHT HIIRAGI
by Toru SAGA

Who Are You?

A KAGEFUMI
SCIENCE FICTION SERIES

|A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES|

瑛斗という実像、トオルという虚像

津 雅樹

Who are you?

by
Msaki TSU 2016

cover illustration

by
Masaki TSU

cover design and art direction

by
Matthew A. KEITH
(t. m. production)

“So, ” she said, “you’ve never got anything about what I meant to do, have you?”

DEUX OU TROIS CHOSES QUE JE SAIS DE LUI: EIGHT HIIRAGI / Toru SAGA

「私からあなたには、何も伝わっていないようね」

佐賀 通「柊瑛斗に関すること」（『久北さやの呟き』かげふみ同好会、2016）より

書き出しの一文が、思いつかない。

私は、目の前にあるパソコンの画面を見つめて絶句していた。

画面上にはワープロ・ソフトのウィンドウが展開されてはいるものの、そこに文字は打ち込まれておらず、本来であれば文字を吐き出すはずのカーソルは、ただ書き出しのために一字だけ下げられた部分で空しく点滅しているばかり。当然のごとくソフトウェアの入力スペースは、白紙のままであった。キーを軽やかに叩いて文章をリズミカルに紡ぐことが期待される両手合計十本の指々は、キーボードから約一センチメートル離れた虚空に浮かんだまま、静止していた。

「書き出しの一文が、思いつかない……」

せめて絶句という事態を打開するために、私は小さく呟いてみた。呟いてみたところで、書こうとする――ないし、書かねばならない――はずの文章を書く行為そのものの出鼻を挫かれたという状況を端的に確認しただけで、いま最も必要とされる書き出しの一文なるものについては、やはりなんの思いつきも得られなかった。

アパートの近くにひかれた細い県道に漂う深夜の閑散とした空気のなかを車が一台走りすぎた。それに震えた梅雨どきの湿った空気が、半分ほど開けた部屋の窓からじっとりと流れ込んでくる。いま頬を濡らしたように感じたのは、夜露の類だったのだろうか。

「落ち着け、落ち着け……」私は、わずかに焦燥を感じはじめた気を静めるため、自分自身に言い聞かせた。「焦ってはいかぬ。状況を冷静に判断しよう」

いま私は、なにを書き出そうとしているのか。

それは、いわゆる小説と呼ばれる文章である。主にフィクションを紡ぎ出す文章の総称としての「小説」という言葉を周回する概念的ないし歴史的もしくは哲学的あるいは批評的言説について、どうこうする気はない。気になるのなら、テリー・イーグルトンや筒井康隆らの概説書を読めばよろしい。

しかして私は、小説執筆を生業にしている作家などではない。本業は会社勤めの平社員だし、この小説が完成したところで金銭的収入に繋がるわけでもない。本作はたしかに、大学

時代の仲間内で作ったサークル〝かげふみ同好会〟がコミック・マーケット九〇――いわゆる二〇一六年の夏コミ――に出品するＣＤ‐ＲＯＭ式合同小説誌『久北さやの呟き』に収録される一篇ではあるものの、出品したとて無料配布のものであり、小説執筆はあくまでも前々からの趣味でもあるので、気分はいたってお気楽なものだ。私を縛るものなど、なにもないのである。

にも関わらず、どうして書き出しの一文が思いつかないのだろうか。

いやむしろ、いまある状況とは、書き出しの一文字目すら思いつくことができないとしたほうが正鵠を射ているだろう。しかし、これもやむだしだ。私ばかりが悪いのではない。

考えてもみたまえ。

日本語の、それも音声だけに限定したとしても、およそ五十通りの選択肢があるわけで、続く二文字目を含めれば五十の二乗――二五〇〇通り、さらに三文字目ともなれば十二万とんで五〇〇〇通りもの可能性があるのだから、これはとんでもないことである。可能性は限りなく無限大であり、思いつかないのも当然だ。数学的あるいは確率論的見地からしても、そうなのである。

「それに、書き出しの一文が思いつかなかったところで、焦ることはないのだ」

なにせ私は、すでにこれから書く小説についてのタイトルも、大まかなコンセプトも決まっ

ているのだから。登場人物の名前すら決まっている。

タイトルは「柊瑛斗（ひいらぎえいと）に関すること」という。

ジャンルはＳＦだ。もちろん、この――あるいは私のいう――ＳＦとはＳＦであって、それ以上でも、それ以下でもない包括的な概念そのものである。

これをサイエンス・フィクションの略称ではなくスペキュレーティブ・フィクションのそれであるとか、いやいやサイエンス・ファンタジーのそれであるとか、もしくは「すこし不思議」のローマ字表記の頭文字だとか、はたまた「すこしふしだら」だとかを、例によって云々するつもりはない。

ＳＦ、というこの二文字の読み方についても同様だ。「えす・えふ」が正しいとか「さい・ふぁい」でなければ許されぬとする議論は、不問に伏される。さらに、そもそも表記においてアルファベット二文字を単純に羅列するのではなく、あいだに中線（ハイフン）を入れて「Ｓ‐Ｆ」とするのでなければ邪道であるとする早川書房の社員のようなこだわりも持たない。

ガンダムだってＳＦだし、エヴァだってＳＦだ。たとえ拡散しようが浸透しようがＳＦはＳＦと呼称された時点でＳＦなのであって、それはもちろんラノベも例外ではない。みんなＳＦでいいじゃないか。このようなことで誰かにウンザリもガッカリされたくはないのだ。

では、なぜ私がＳＦを書こうとするのか。それは、私がＳＦを好きだからなにほかならな

い。以上。

しかし、ＳＦが包括的ジャンルとしての概念であるがゆえに、そのなかで大小様々な細分化が施されることは認めているし、そうでなくてはなるまい。そして、私がいま書き出そうとしているＳＦ小説にこれを当てはめるなら、〝ヒーローもの〟という集合に振り分けられるだろう。

古くはスーパーマンから月光仮面、ウルトラマンに仮面ライダー、いま華やかなりしアベンジャーズと例証に欠かないジャンルであり、それゆえにある程度の読者数確保が想定される。みんな誰もがヒーローでありたいと願い、誰かがヒーローであって欲しいと願うのは、知ってのとおり人間の三大欲求のひとつである。素人とはいえ、ある一定数以上の読者を獲得したいので、こういうプローデューサー的見地も必要なのである。

私の小説におけるヒーローの名前は、タイトルが示すように柊瑛斗という。彼は、とある高校に通う一介の男子高校生であり、見たところなんの変哲もない。しかし――もちろん、というべきか――彼には常人が持ち得ない特殊能力が備わっている。

彼の能力とはなにか？　それは〝速さ〟である。彼は文字どおり目にも留まらぬ速さで移動することができるのだ。その能力を駆使して、強大な敵と闘っているのである。

だが、本作の主人公は――多くのヒーローものがそうであるようにヒーロー自身――柊瑛

斗本人ではない。本作の主人公でかつ語り手となるのは、彼の友だち「僕」なのである。

ここが、本作のミソのひとつなのだが、「僕」は柊瑛斗のような特殊能力を持たない、まったくの一般人である。ただの人間、本当にただの男子高校生であり、「僕」にフィクション的虚飾点があるとすれば、友だちが〝速さ〟の能力者を持つヒーローだという点以外において存在しない。そんな「僕」がことあるごとに柊瑛斗を観察するでもなく眺める……というのが本作の基本的物語構造である。

「しかし『僕』は……」私は、キーボードの上に漂う指々に向かって囁きかけた。「しかし僕は一般人なのだ……うん」

だから「僕」は、実質的な意味においてヒーローとしての柊瑛斗を観察できない。彼は一般人の目には留まらぬ〝速さ〟の持ち主なのであり、したがって「僕」は柊瑛斗が能力を呼び起こした瞬間にはかろうじて立ち会えるものの、次の瞬間に彼はもうそこにいないのだ。それゆえに「僕」は柊瑛斗がどのように、そしてどんな相手と闘っているのか、はたまた彼がどうして特殊能力を持ち得、かつ闘い続けるのかを最後まで知ることはないし、「僕」自身もそれでいいと思っているのだ。

なぜなら、それが「僕」の日常だからである。

これは、柊瑛斗の具体的な生い立ちや闘い方、または悪の枢軸についての詳細を考えるの

を、私が面倒くさがっているのでは決してない。考えよというなら、いくらでも考えてさしあげよう。そうではなく、本作では柊瑛斗というヒーローと友だちになった「僕」の日常――その主観的感覚を描き出すことこそ目標であるのだ。

『僕』の日常――僕の……」

すでに広く市民権を得て久しい〝日常系〟というジャンルがある。

かつて高橋留美子が漫画『うる星やつら』で創始し、それをテレビアニメ化した押井守が自らアニメ版のなかで文学批評的に定義し、宮台真司が名づけ親となった〝終わりなき日常〟的フィクション――友情も恋愛もドタバタも時間経過さえも各話が終われば リセットされて永遠に終わらない物語の連なり――の変形として二〇〇〇年代ごろから登場したジャンルらしい。

オタク文化に詳しい精神科医・斎藤環が「こいつのせいで俺は……」と冗談めかして示す、あずまきよひこの四コマ漫画『あずまんが大王』あたりが代表例とされるような、時間経過――たとえば高校三年間といった、終わることを前提とした期間設定――を明確に規定し、かつ『うる星やつら』の諸星あたるのような読者の感情移入を誘う「主人公」を廃し、複数人のキャラクターたち――美少女の友だち同士であることが多い――が織り成す他愛のないやりとりを眺めるのを楽しむ……そういったジャンルなのだそうだ。

私自身もこの手のジャンルは大好物であり、よくアニメなどで観ては楽しんでいる。なかでも、とくになもり先生の描く『ゆるゆり』シリーズは大好きであり、生まれ変わったあかつきには、なもり絵として生まれたいと願う所存である。

閑話休題。

しかし厳密には、私の書こうとする小説は日常系には分類されまい。そう、日常系には存在しないはずの明確な主人公「僕」が存在するからだ。

『僕』の存在……僕の存在はどうなるというのか……」

つまり私は今回の小説において、日常系的ＳＦを書くのではなく、日常系で描かれる「日常」を眺めて楽しむ消費者をＳＦ的に書いてみたいと思っているのだ。無個性かつ語り手としての「僕」は、私を含めた読者そのものの象徴であり、主観となるだろう。

しかしこれを、なぜか「僕」のまわりにたくさん跋扈（ばっこ）する美少女たちを配して描こうものなら、これはもはや〝ハーレムもの〟であって、私の目指す小説ではない。そもそも、そのようなジャンル的希求によってしか成立しない状況設定は、不可解極まりない。

だからこそ、柊瑛斗という――「僕」と同じ――男子高校生を配したのだし、そしてヒーロー／能力者は彼以外にもいることを「僕」が知る、という展開も用意している（しかし「僕」はやっぱり知るだけである）。そんな複数人いる――らしい――ヒーローたちの日常を、特定の誰

かに感情移入するでもなく――むしろ積極的に観察できないという状況において――それをいたって日常として「僕」は眺めるのである。「僕」は常に蚊帳の外であり、いいかえれば、ずっと安全圏にいて、彼／彼女たちを眺めていられるのだ。

もちろん「僕」は、柊瑛斗や能力者たちの特殊性について考えを巡らすこともあるだろう。しかし――これが重要なのだが――それによって「僕」に大きな変化が訪れるのでもない。柊瑛斗を眺めて暮らす「僕」自身の日常は、日常のままなのである。

このように、いわゆる日常系作品をただ眺めて楽しむ消費者をＳＦ的に構造化し、「僕」＝読者／消費者的存在を無意識的にでも立ち上げて、現実の日常に読書体験としてフィードバックしようとする試みはしかし、面倒くさいオタクが滅多やたらとやりたがる〝オタクの相対化〟という文化批評的側面だけに留まらない観点を獲得すると自負している。

想像してみよう。もし私たちが本当に柊瑛斗のようなヒーローと友だちになったとしたら、はたして多くの物語がそうであるように、彼／彼女について積極的に知ろうとするだろうか。物語の狂言回しなら根掘り葉掘りにそうするかもしれないが、しかし現実の知人や友人や親類について私たちはどれほどのことを知っている――知ろうとするだろうか。知りたいと思うだろうか。隣人の顔すら知らぬこの世の中において、なにをかいわんやである。

あるいは時々刻々と変容する現実の社会についてはどうか。たとえば、どこかで大きな事

件――殺人や強盗、はたまた大地震やテロ、政治的転換など――が起こったとき、私たちはいかほどのことを知るだろうか。たしかに犯人の名前や被災地の場所といった大まかなことは知っているだろう。しかし、実際の状況やその後の詳しい変化、宗教対立における宗派の違い、日々のなかでいくつの法案が採決されているなどといった具体的なことを、はたして私たちはどれほど知るだろうか。よしんば詳細に聞かされたとして、知ろうとするだろうか、知ることができるだろうか。そして、そうしたところで、どれほどの変化が私たちの日常に訪れるというのだろうか。

一個人の記憶力には限界があるし、その容量の割き方は自身の興味に簡単に左右されてしまう。忘れることだってある。なにより私たちは現実世界に対して無力であることに、私たち自身が気づいていないか、もしくは無関心であり、むしろ気づいていながら、それを是とさえしてはいまいか。

私がテレビや新聞でニュースを見るときによく感じる――だからといってなにもできない――この無常とも不条理とも無気力ともいえる静かな絶望すらない日常的虚無感を立ち上がらせることはできないか……、そのように私は考えて、この物語設定を練ったのである。

この試みがうまくゆけば、多くの優れたＳＦ小説がそうであるように、多分に社会批評的観点をも獲得されるのではないかと踏んでいる。

ことほど左様に、幾重にも重ねられた構造的強度をもってすれば、いくら私が単なる素人小説の書き手のひとりであっても、そのなかから一歩抜きん出ることも夢ではない。

とはいえ、これら構造的言説をなんの工夫もなく書くことは、これを好しとしない。なぜなら、私がいま書き出そうとしながら最初の一文すら思いつかないＳＦ小説は、エッセイでも思想書でも、いわんや論文でもなく、ＳＦ小説なのであって、すなわちエンタテインメントであるからだ。

本作がエンタテインメントである以上、その第一義は娯楽であり、読み取られるであろう構造的言説は後から透けて見える程度に抑制しなくてはならず、さらには読者の興味を持続させる物語と洒脱な文章を刻々と展開させ、かつそのフックとなるべき――「僕」や柊瑛斗とは別の――キャラクターを新たに登場させるべきなのは必要十分条件である。そして、このキャラクターが彼らとある種の三角関係を織り成す奇天烈な乙女であれば、素人小説である本作にあえて商業的観点を想像的に設置したとしても、その実利性は高まるに相違ない。

なおかつ、本作が「僕」の一人称小説である点からも、もうひとりの主要キャラクターが必要とされる。というのも、あくまで「僕」と柊瑛斗との閉じられた関係性のなかでのみ物語を展開してしまっては、それがある種の偏向を有することを避けらない。つまるところ、「僕」の眺める柊瑛斗の特殊性を「僕」の主観だけで定位しようすれば、その主観性ゆえに、

それが「僕」の勝手な思い込みや捏造である可能性を否定できないのである。

クリスティの『アクロイド殺し』を例に挙げるまでもなく、〝信用できない語り手〟の系譜は星の数ほど存在するが、そうなってしまっては私の意図する構造的テーゼの普遍性を獲得できない。そうとなれば、「僕」以外にも柊瑛斗の特殊性を認識する客観的主観が必要不可欠なのであり、この点においても第三の人物たる乙女の存在が要される。

そして無論、この点に関しても私は抜かりなく、ちゃんと考えているのである。

その乙女の名は高梨椿子（たかなし・つばきこ）といい、柊瑛斗や「僕」と同い年くらいの少女である。高梨椿子もまた、柊瑛斗の〝速さ〟という特殊能力について認識している人物であり、彼女は彼のことを巡って、「僕」の前に現われるのである。高梨椿子の目的は「僕」を通じて柊瑛斗に変化をもたらすこと、そして、それによって彼女が柊瑛斗の「ヒロイン」となることだ。

高梨椿子の存在によって、本作のエンタテインメント性はより一層確保され、また、彼女によっても柊瑛斗の特殊性が同定されることによって「僕」が信用できない語り手である懸念も打破されるだろう。さらには、高梨椿子の「柊瑛斗のヒロインになりたい——が、まだなれていない」という奇天烈な物語的動機は同時に、彼女が「柊瑛斗のヒロインにはなれていない——が、すでにして本作のヒロインである」というアイロニカルな状況を獲得する。このように、ある種のメタフィクショナル性を彼女に負わせることで、本作は文学批評的側

面においてもさらなる強度を得るのである。

そしてやはり、高梨椿子が「僕」に干渉をしたところで、柊瑛斗を眺める「僕」の日常に大きな変化は訪れない。たしかに、彼女の「僕」への働きかけによって、柊瑛斗には変化が訪れるだろう。しかし、「僕」はそれすらも「僕の日常」として日々を淡々と過ごしてゆくばかりであり、一向に変わる気配を見せないのである。彼女によってもまた、本作に有される構造的テーゼが深まることだろう。

ことほど左様に、私の脳裏には、これから書き出そうとする小説について、タイトルからキャラクター設定、そしてこれだけ強固なコンセプトが完成しているのだ。

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」と言った。ならば私はこう言おう――「我思う、ゆえに我が小説あり」と。私が書こうとする小説について、私はすでにしてこれだけのことを考えているのであり、であるならば、私の小説はすでに存在――完成――しているのと同義である。ラカンの対象aを例に挙げるまでもなく、人間が言葉を使いはじめた瞬間から、小説は存在するのである。

あるいは、監獄において看守の実在は重要ではなく、囚人に看守の存在を想起させるパノプティコンという構造そのものこそ重要なのだとフーコーが説くように、私の書こうとする小説がすでにこれだけの構造的強度を有するのであれば、それを有する小説そのものも存在

を保証されるはずである。

だから、書き出しの一文でいま躓(つまづ)いていたとしても、なんら問題ないのである。形而上学的には、すでに私は小説を書き上げたに等しいのだ。

書き出しの一文がなんだ！　恐れるに足らず！

ふと、ひんやりとした空気が頬を撫ぜた。それにつられるように、さらさらという音が窓からつつましく聞こえてきた。

雨が、そぼ降り出したのだ。

パソコンの画面を凝視したまま耳をそばだてると、いくつもの雨の滴が、この部屋から漏れ出た光を反射して弱々しくきらめきながら落ちてゆく様子が想像された。そして、滴は下のアスファルトに当たって砕け、そして地中深くに染みてゆくのだ。

雨は、このまま朝まで、あるいは明日いっぱい降るのであろうか。そうであるならば、明日は傘がいる。荷物がひとつ増えるので、たいへん面倒なことだ。荷物がひとつ増えるだけならまだしも、傘をさせば必ず顔や服など、どこかが濡れてしまうのに決まっているのだ。そうすると気分も滅入る。たいへん面倒なことだ。

「それにしても……それにしてもなぁ……」

どうしてこうも書き出しの一文が思いつかないのだろう。地の文ではじめるべきか、ある

いはセリフではじめるべきなのか、それすらも思い浮かばない。

そもそも、なぜ柊瑛斗の名前が柊瑛斗であり、彼の能力が〝速さ〟であったのか。これをまずはスマートに読者に印象づけなくてはならない。

「柊瑛斗が瑛斗という名である理由……」

それは、いたって単純な理由からであった。

先日、大学時代の仲間内で作ったサークル〝かげふみ同好会〟の面々とスカイプで通話していたときのことだ。私は、彼らに今回書こうとする小説について相談を持ちかけたのだ。

「今回はヒーローものにして、特殊能力保持者のキャラクターを出したいのですが、なにかキャッチーなフレーズとか言い回しってないですかね？　たとえば、ひたすら〝速い〟移動速度を持っているとかだったら……」

「ううむ」「そうだなあ」「ぐう」「はれほれひれはれ」と同好会メンバーたちが回答をひねり出そうとそれぞれに呻き、そのハーモニーはしばらく消えることがなかった。

そのとき、ひとりの男が口を開いた。大学ではふたつ先輩のマサキであった。何度も大病を患っては入院を繰り返し、ガリガリに痩せ細ってもなお死なず、三度の飯を喰うように映画ばかり観あさっている面倒くさい映画オタクであるこの先輩は、次のように言ったのだった。

「トオルよ、〝速さ〟といえば8、エイトではないだろうか」
「8、エイトですか」
「そう。7、セブンの次の」
「9、ナインでもなく？」
「あれはいけない。頭にゼロゼロがいるからね」
「相変わらずネタが古いですねえ」
「まあ、僕は『8マン』を観たことも読んだこともないけれど」
　マサキが映画以外からの参照項を引っ張り出してきたことに、私が少々驚いたかどうかはさておき、その時点でマサキと同じく『8マン』を観たことも読んだこともなかったが、しかし薄ぼんやりとした作品イメージを持っていた私――おそらく当のマサキもそうだったに違いない――は膝を打った。
「なるほど。たしかに8マンは、走るのが早いですものね」
「そう」マサキは自分の助言が受け入れられたことを知って、満足げに頷いたようだった。「だから8とかエイトにまつわるフレーズや言い回しを考えればいいのじゃないかしらん」
『8マン』とは、悪の策略によって謀殺された刑事・東八郎が、その人格と記憶をスーパーロボットに移し替えて復活し、数々の怪事件や難事件に挑むというSF漫画である。原作を

『幻魔大戦』などで知られる平井和正が、作画を桑田次郎が担当した本作は、一九六三年から『週刊少年マガジン』誌上で連載され、テレビアニメ化もされた。

8マンの特殊技能は、このとき私たちが薄ぼんやりと考えていたような、足が速いことばかりではない。最高時速三〇〇〇キロメートルで走ることのできる加速装置はもちろん組み込まれているし、特殊合金の頑丈なボディ、壁すら透視する目、さらに超音波をも聞き取れる耳を持った、スーパーロボットの名にたがわぬキャラクターなのである。私がマサキと会話した時点でググりもしなかったことには、深く反省の意を表するものである。

「8……、エイトかぁ……」私は、しばしその単語を脳裏で弄(もてあそ)んだ。「じゃあ、ヒーローが能力を発動するときに、『レベル〝8〈エイト〉〟をうんたら……』と呟く、なんてのはどうでしょうね」

「いいね」と、マサキは言った。

「いっそ名前も〝えいと〟にしようかな」と、私は考えを口に出した。

「よきにはからえ」と、マサキは言った。

こうした理由で、特殊能力〝速さ〟を有するキャラクターの名前は晴れて「瑛斗」となったのである。彼の苗字「柊」は、なんとなくである。

ということは、いま書き出しの一文をひねり出そうとして四苦八苦しているこの小説の主

たる登場人物・柊瑛斗とは、マサキの軽率極まる発言によって定義されたことになり、その彼についてあれこれと眺めて暮らす「僕」の日常を描出しようとする本作において、その描写の多くが柊瑛斗に当てられるのは当然の節理であることも考え合わせれば、それについて書き出そうと悩み苦しんでいる私のいま現在の状況を作り出した原因は、大いにマサキにあるのではないか。

否、結論が出た。マサキが悪い。

フロイトは常に、患者の精神的トラウマを外因性とした。先人の見地に私も従うものである。つまり、マサキが悪い。

雨脚がすこし強まったようだ。つつましかった雨音が、ざらざらと濁音じみてきている。

「あぁ……」

私はため息をついたつもりだったが、口からまろび出た音は、まるで嗚咽のような情けない声となった。夜の帳のなかでの孤独を煽るかのような雨音にほだされたのだろうか。

どうして最初の一文が、こうも思いつかないのだろうか。それさえ書けてしまえば、あとはゲレンデを颯爽と滑り降りるスキーヤーのごとく、すらすらと本文が続いてゆく感触、もとい確信がある。それなのに、私はリフトの降り口でいまだマゴマゴさせられているのだ。

状況は、なにひとつ変わっていない。画面に展開されたワープロ・ソフトは白紙のままだ

し、キーボード上に浮遊する指々は静止し続けている。変化があったとすれば、いくらかの時間が過ぎたこと、それによって雨脚が多少強まったことくらいである。あと、寿命もすこしばかり目減りしただろう。それらは、私にすこしの好機をもたらしてくれないものばかりである。

これ以上、無為に時間が過ぎるのならば、私は最初の一文を諦め、いったん寝なければならぬ。なぜなら、明日も労働だからだ。労働なればこそ、寝過ごすわけにはいかぬ。

だが、労働であればこそ、それが孕む問題点をきちんと見極めなければならない。

そもそも、男女共同参画が叫ばれて久しいにもかかわらず、相も変わらずこの国において男女間における差別や偏見がいまだ根強く残り続け、あろうことか政治屋すら無頓着にも正気とは思えない発言を繰り返しては反省の色すらみせないのは、人間の営為たる日常の大部分を占める労働が男性原理主義ないし父権制度的価値観によって長らく支配され続けてきたことの弊害といえよう。

なんとなれば、労働とは男根のメタファーそのものであり、真に規制されるべきは、楽器だの戦車だのといったアニメの小道具をそれとして槍玉に挙げて文化的／表現的衰退を図るのではなく、労働という体制そのものではないのか。

時代は、問題の根本を解決せねばならない段階を当に迎えている。それには、抑圧を手段

に用いるのではなく、抑圧そのものを解放せねばなるまい。そうすれば、男女関係なく、みんなが幸せになるはずである。

だがしかし、一介の労働者という被抑圧者たる私は、日常という現実に対して、あまりにも無力であることもたしかであり、明朝にその現状が一転しているとも考えづらい。考えづらいというか、つらい。

明日も労働だ。

だのに、私はただの一文も、書こうとする小説の最初の一文すらも一向に思いつけない。ワープロ・ソフトの白い画面を見続けるのも、いいかげん疲れた。私のもとに、天性の閃きを与えてくれる芸術の女神ミューズは訪れないのか。この際、二次元か三次元かは問わない。神よ、私にミューズを遣わしたまえ。そうでなくとも、せめて麗しの乙女を！

そのとき、私の後ろから「ゴトリ……」という物音が聞こえ、私は思わず振り返った。

私の背面には、すこしの空間をおいて、襖（ふすま）で仕切られた押入れがある。あるいは、そのなかに仕舞いこんだなにかが崩れたのだろうか。見ると、襖はわずかに開いており、白いワープロ・ソフトの画面とは対照的に黒々とした闇が、その隙間からのぞいていた。

私は無意識に唾を呑みこんだ。

そして、連想した。その闇の奥から、なにかが私をのぞいているのではないか。薄汚れた

白い衣服をまとい、長い黒髪を垂らしたなにかが睫毛のない瞼を見開いて、じっとこちらを窺っているのではないか。まるで羨むように、ねめつけるように、じっと……。

「へ、へへ」

私は無理やり笑い声をひねり出し、首を横に振ってから、パソコン画面に向き直った。たしかに押入れから物音はしたようだが、それをなんらかのオカルト的存在の実証に結びつけるなど、思考の短絡も甚だしい。そんな短絡的思考を煽るように、思わしげに襖が開いてはいるが、あれは単に私のぐうたらが招いた偶然にすぎない。そうでなければ困る。そうでなければ怖いじゃないか。

「だいたい……」私は、すこしの怒気をはらんだ小声を出した。「あれがいかんのだ、あれが」

そう、私がわざわざ深夜に要らぬ妄想を展開して恐々としてしまったのには、それ相応のわけがある。

先日、私は近所の映画館に出かけて、とある映画を観たのだ。それは『貞子 vs 伽椰子』という新作ホラー映画だった。

これは、『リング』シリーズに登場する貞子と『呪怨』シリーズに登場する伽椰子という、普段ホラー映画をほとんど観ない私ですら名前と容姿くらいは知っているジャパニーズ・ホラーの二大スターが揃い踏みして闘うという、潔いほどタイトルに偽りのない映画である。

普段ホラー映画を観ないのは、私がそういう怖いものを苦手としているからである。なぜ対価を支払ってまで、そんな怖い思いをしなければならないのか、と常々思っている。にもかかわらず、なぜ明らかにホラー映画であろうことが疑いのない本作のために、私が映画館までのこのこ出かけたかと問われれば、これはもう周囲にほだされたとしかいいようがない。

公開後、まもなく沸きあがった絶賛ムードとともに、私も嗜んでいるツイッターのタイム・ラインを眺めれば、いかにもオモチロ可笑しそうなことが書いてあるのだ。いわく「ホラーじゃないよ、バトルものだよ」「明るくて、もっぱら笑えるよ」「むしろ百合映画だよ」云々とさえずる声を見れば、否が応にも好奇心をそそろうというものだ。

しかも面倒くさい映画オタクであるマサキも「これを撮った監督の映画は一風変わっていて、かつ面白いから失敗はないと思うよ。僕はまだ『貞子vs伽椰子』を観ていないけれど……」などと言うのである。

こうした声にそそのかされて映画館まで足を運んだ私は、それが自らを死地に追いやる行為だったことに、後になって気づかされるのである。この愚行を、かのニーチェなら「この駱駝野郎！」と罵るであろうか。

それにしても、である。

馬鹿野郎、めちゃくちゃ怖いじゃないか！　おかげで安住の地であった我が部屋にひとり

でいることすら怖くなってしまったのだ。挙句の果てに、風呂場で髪を洗えば、首筋を血色の悪い手がぬらりと這ってくるような気がしてならない。なんと迷惑なシーンを映画に組み入れたのか。これではおちおちシャワーも浴びられない。目すら閉じられない。いくら元がどれだけ乙女であっても、あんな怨霊の類はひとりたりとも私の押入れにいて欲しくないよ。

なにが笑えるバトル百合映画だ！　いたいけな私を弄びやがって、世間はなんて嘘吐きばかりなのか。そもそも、純情無垢の化身である私に対して、自身が観てもいない映画を勧めてくるマサキは、いったいどういう神経をしているのか、小一時間問いただす必要がある。

だいたいにおいて、マサキが悪い。

雨脚が一段と強まったようだ。水気をはらんだ空気が、いよいよ部屋に流れ込んできた。

私は椅子から立ち上がって、部屋の窓を閉めに行った。そっと窓をスライドさせて鍵をかけてしまうと、いままで聞こえていた雨音はヴェールに包まれたようにくぐもって静かになった。そのまま今度は押入れの傍まで行き、なるべく空隙の闇を見ないように努めながら、私は襖を閉じた。

今度はリブート版の『ゴーストバスターズ』を観に行こう、と私は思った。予告編を観たけれど、こちらのほうがよほど笑えるバトル百合映画なのではないかという確信がある。私

の心に巣食う陰湿な日本的恐怖を、アメリカ的能天気さが力強く駆除してくれるに違いない。

私は振り向いて、机の上のパソコン画面を見た。

なにも書き込まれていない。そのあまりの白さに、私は俯き、弱々しく首を横に振ることしかできなかった。

「もうよい」私は爪先を見つめながら決心した。「きょうは戦略的撤退を図る」

私は屹然と頭を上げ、回れ右すると、居間を離れて台所に向かった。そして、わき目もふらずに冷蔵庫までたどり着くと、むんずとドアを掴んではそれを開け、なかからひんやりと冷えた缶ビールを一本取り出した。向き直りつつ冷蔵庫のドアを閉め、居間に舞い戻ると、きょう一番のスムースな動きで椅子に腰掛けて缶ビールのタブをぷしゅりと開けた。そして、そのままビールをいくらか口に含んだ。なめらかで芳醇な刺激が舌の上で踊り、喉を潤しながら胃の腑へと流れ落ちていった。

「ハァ……」

と、極上のため息をついて、私は再び缶ビールを傾けた。やがて、それに含まれるアルコールが血中を巡り、ほどよい酩酊感が私の口元を緩めた。

ビールはすごい――と、私は思った――一向に思いつかない小説の書き出しへの焦燥も、雨天への憂鬱も、労働への不満も、孤独への寂寥も、怨霊への恐怖も、すべて忘れさせてくる。

私は、すでに無我の境地にあった。

なにものも私を縛らない。思うことがあるなら、それはただ、ビールはすごい、という一点に集約された。蜂蜜を希求し続けるくまのプーさんも、こんな心もちだったのであろうか。

ビール……これほど素晴らしい三文字があるだろうか。ビールを人類の生み出した最高の叡智のひとつに数えても過言ではあるまい。缶ビールを空けながら、私は胸中で叫んだ。すべてのビールに祝福を与えよ。ついでに、ほんのすこしでいいから私にも。

心地よい満足感とともに缶ビールを飲み干してしまうと、私は机の上に缶を置き、しばらくのあいだ指でそれを弄んだ。

もう一本飲んでしまおうかしらん、と思ったとき、私がさっきからずっと気になっていたことが急に脳裏をよぎった。

ビールをしても、忘れられないなにか。

それは私にとって、真に重要なことに相違なかった。

形容し得ない、しかし、とてつもなく重要なことだ。

そう、さきほどから目に見えないところで私をずっと観測し、そして私の量子力学的可能性を収束し、私を規定せしめ続けている

あなたは誰だ？

fin.